

善く生きるための英知を求めて

# 道徳科学研究フォーラムを開催

テーマ 道徳とウェルビーイングの新時代

道徳科学研究所は二月二十六日と二十七日、廣池千九郎記念講堂（千葉県柏市）において第七回道徳科学研究フォーラムを開催しました。テーマは「道徳とウェルビーイングの新時代～善く生きるための英知を求めて」。ウェルビーイング、道徳一体、学問と信仰という三つの領域から、精神的な充足や生きる意味を見失いがちな現代社会において「善く生きる」とはどういうことかに迫りました。



## 基調講演

日本社会に根差した  
ウェルビーイングと  
感知融合の道徳教育

高橋史朗教授の基調講演では、OECD（経済協力開発機構）によるPISA（生徒の学習到達度調査）二〇二二調査結果や「子供のウェルビーイング」指標における日本の子供の課題点として、「困難に直面したときに解決策を見つけないことができる」「人生に意義や目的を感じている」「人生に満足している」がいずれも世界最低水準である

ることを指摘。SDGsを日本的に継承・再発見し、西洋由来のウェルビーイングを「日本的幸福」

「協調的幸福」で捉え直す国際発信の重要性が論じられました。さらに「日本型ウェルビーイング」の構想として、「進歩から進化へ、対立から場へ、普遍から通底へ」という方向性が提示されました。感性と知性の融合による道徳教育の再構築については、遠藤利彦の『情の理』論や、芳村思風の感性論、脳神経倫理学の最新

研究などを踏まえ、「情動的共感」と「認知的共感」をつなぐ「対話」の重要性が強調されました。

## 個人発表①

獲得形質の遺伝を包摂した  
現代生物学の知見

— 廣池千九郎の

遺伝学研究との関わりから

立木教夫客員教授は、廣池千九郎の遺伝学研究との関わりから、現代生物学の視点に基づく獲得形質の遺伝可能性について報告。廣池が『道徳科学の論文』で提示し

た一代獲得形質の遺伝可能性という仮説について、エピジェネティクスや遺伝子—文化共進化の議論の展開により、遺伝子遺伝を超えるより広い遺伝可能性が認められるようになってきたことを説明しました。遺伝子外遺伝として「親の影響」「エピジェネティックな遺伝」「遺伝された微生物叢」「動物文化」の四つが紹介されました。

### 個人発表②

## 廣池千九郎の思想を伝える 谷川・大穴記念館の 保存と改修

矢野篤主任研究員は、財団創立百周年記念事業の一環として行われた廣池千九郎谷川・大穴記念館の保存と改修工事について報告。谷川・大穴記念館は、令和四年十二月に設置された保存委員会による調査の結果、外部専門家から「廣池の自然や人に対する慈愛や合理的な考え方を具体的に目の当たりにできる希少な建築」との評価を得ました。令和七年三月十三

日には、谷川の麗澤館・神壇、大穴の惣しよぶの湯・脱衣場が国の登録有形文化財として登録されました。特徴として、杉皮葺きの屋根の上に杉皮葺きの屋根を重ねるなど、地元の杉材を多用した独特な外観が挙げられました。

### シンポジウム①

## 廣池千九郎が提唱した 「道経一体論」と経営理念

大野正英教授のコーディネートのもと、経営現場における道徳実践について議論が行われました。大塚祐一客員研究員は徳倫理の視点から、企業を従業員の徳を育む「実践の場」として捉えるアプローチを提示。寺本佳苗客員研究員は、道経一体経営は日々の意思決定と行動を方向づける経営理念の実践であることを提起し、経営理念が「経営者の精神の表れ」であると同時に「企業の目的や目標を示すもの」として、精神と形式をつなぐ中核であることを論じました。藤井大拙企業センター長は、道



経一体論が永続を期する経営のための「動機・目的論」および「原理・原則論」であることを論じました。

### シンポジウム②

## イエスは神か、救世主か、 それとも聖人か？

— 廣池千九郎の  
聖人研究との関わりから

冬月律主任研究員のコーディネートのもと、廣池千九郎のユダヤ・キリスト教へのアプローチに

ついて議論が行われました。ピーター・ラフ客員教授は、廣池がイエス・キリストを「神」や「救世主」としてではなく「聖人」として位置づけた点に着目し、その背景と意義について考察しました。廣池が「聖人」というカテゴリーを用いることで、イエスを他の聖人と対等に位置づけ、最高道徳の普遍性を保持しようとしたと指摘しました。指定討論者として中山理客員教授と田島忠篤客員教授が参加し、議論が深められました。

